

遅れていた水源保護条例

答申から2年、やっと3月議会に提案

1月16日の市議会全員協議会に、「鈴鹿市水道水源流域保全条例」の概要が報告されました。鈴鹿市民の飲み水や生活用水である上水道は、自己水源と外部水源（北勢用水・三重用水）を使っています。その85%を占める自己水源は、すべて鈴鹿川流域の約30本の井戸から汲み上げる地下水です。したがって、この地下水に影響する排水や取水を規制して、将来も安定した水質と水量の水を確保するための、市としての施策が求められていました。

私は2001年9月議会で鈴鹿市も「水源保護条例」を作ることを求めました。その後水道局は検討を進め、2003年5月に専門家や市民からなる審議会を立ち上げ、同年11月には答申が出されました。

ところが水道局は答申に沿った条例化を、ずるずると遅らせているので、私は再び2005年3月議会で、早く条例を出すよう求めました。そしてやっと今回、答申の「きびし過ぎる」部分を若干変更して提出に至ったのです。3月議会で可決されれば、本年10月から施行される見通しです。

提案された条例の内容は、以下のとおりです。

鈴鹿川流域の地下水の涵養源となっている区域を「保全区域」とする。

（鈴鹿川以西全体と、国府・井田川・庄野地域）

その内、地下水に直接影響する区域を「特別保全区域」とする。

（鈴鹿川の両岸周辺）

「保全区域」では産廃処理場や、排水日量20トン以上の事業所を規制。

（答申では5トン以上。個人住宅以外ほとんどが規制されるので変更）

「特別保全区域」では、汚水の地下浸透の禁止、水源井戸から250m以内の井戸を規制。

新庁舎オープン、にぎわう展望ロビー

1月4日、市役所新庁舎での業務が始まりました。年末年始返上の大引越し作業によって、市民窓口も予定どおり始まりました。職員も市民もまだ慣れていないので、しばらくは落ち着かないでしょうが、これまでのように長年バラバラで古くさかった庁舎が、やっとまとまって新しくなったということで、気分はいいものです。

市民に開放された15階の展望ロビーには、連日多くの市民が訪れて盛況です。テーブルやイスも多くあるので、昼食時は満員になります。何といても「タダ」というのがいいのです。市民の財産なので、何時間いてもちっとも遠慮がいきません。「何も用事がなくても、ちょっと市役所へ」「景色のいい展望ロビーで待ち合わせ」「ついでに議会でも見ていこうか」など、市民の皆さんと行政との距離を近づけることになれば、と思います。

新議場での初仕事は、議長の選挙

昨年末に山本孝議長が急逝されました。山本氏は本当に楽しみにしていた新議場の議長席には一度も座ることなくあの世に去っていき、皮肉にも新議場での初会議は、山本氏の後任を選ぶための臨時議会でした。新議長には儀賀久明氏が選ばれ、4ヶ月の残任期間をつとめます。

故山本孝氏との「合併反対共闘」を思い返して

山本孝氏は前期の2002年12月議会、と時の加藤市長が提案してきた「四日市市との大合併」議案に反対した18人の議員のまとめ役として、頑張りました。合併議案は否決、鈴鹿市は単独の町としての道を選んだのです。

もしあの時、1票差でも可決されていたら、いま「鈴鹿市」はありません。したがって「鈴鹿市役所」もなくなっていて、当然ながら新庁舎も建っていませんでした。そんなことから、合併しなかった鈴鹿市の新庁舎の議長席に山本氏が座ることは、実にふさわしいことだと私は思っていました。まことに残念なことでした。

お隣の津市は、この1月から10市町村の大合併で、だっただけの新「津市」になりました。端から端まで車で2時間半もかかる町で、市民に行き届いた行政が出来るはずありません。鈴鹿市の選択は正解でした。

移動図書館がなくなるってホント？

先日、市民の方から「移動図書館が今年からなくなるというウワサが飛び交っているけど、もう決まっているのですか？」との質問があって、ビックリしました。さっそく図書館や文化振興部に問い合わせると、単なるウワサではありませんでした。

いま移動図書館に使っている車両は、NOX・PM法によって今年10月から使用できなくなるので、車両を買い換えるか、買い換えずに廃止するか、の選択をせまられ、の廃止の方向で内部検討しているというのです。

最低ラインのサービスの切り捨ては許されない

鈴鹿市の図書館は、この広い市域に本館が1カ所あるだけです。普通の町なら各地に「分館」があって、全域の市民を対象にしたサービスが展開されているのですが、鈴鹿市はその計画すら持っていません。

移動図書館は、この欠点を補うためのサービス手段で、本館から遠い地域を回っているのですが、1台しかないので回るサイクルは月に1回、しかも1カ所1時間ほどです。利用者にとっては、本当に最低ラインのサービスといえるもので、これを無くそうというのは、とんでもないことです。

「利用者がへっているから」という理由は、本館に行く手段のないいちばんの「弱者」を切り捨てる理屈です。また、毎週回るほどのサービスにすれば、利用者はぐんと増えます。不便だから利用が減る、という悪循環は、バス路線の廃止の理屈と同じです。

鈴鹿市は西部バス路線廃止にかえて、便利なCバスを走らせたというすばらしい実績を持っています。「不便」なら「便利」にすればいいのです。たかが1600万円の新車費用がもったいないなどとは、恥ずかしくて言えないでしょう。「あのCバスの鈴鹿市が」と笑われますから。

私はかつて図書館職員だったことから、議会で何度も「図書館の全域サービス」を求めて質問しました。少なくとも消防署くらいに東西南北に分館を作れば、やっと全国平均レベルの図書館サービスになると力説してきましたが、なかなか方向が出てきません。具体的なサービス向上策もなしに、ただ移動図書館の廃止だけを先行することは、認められません。

ホームページを開いています。ぜひご覧下さい。

「石田秀三」で検索すれば、パッと出てきます。「活動日誌」も掲載中。

ずいそう

共産党の大会について

日本共産党第24回大会が開かれた。共産党の大会は、自民党や民主党などのように半日足らずでアッという間に終わるものでなく、4日間じっくりと議論する。また早くから議案を公開し、各県各地区での討議を重ねるとともに、各個人からの意見も直接あげるシステムになっていて、大会最終日に多くの修正をして採択される。

役員選挙もきちんと投票で行ない、他の党のような派閥抗争や裏取引、本音と建前などは、何もない。「何もないことがおかしい」という意見は、これだけ民主的に運営がされていることをご存知でないのだろう。

伊豆の山の中で世界と日本の未来を語りあう

私は1987年、議員に初当選した年11月の第18回大会に、三重の代議員として参加したことがある。会場の伊豆学習会館は熱海の山の上であり、参加者は全員、海に近い民宿から毎日みかん畑の中の山道を、小一時間かけて汗をふきふき歩いて通うのである。（もちろん弱者には車を出している）みんな文句も言わず、楽しそうに山を登っていく。大都会東京ではなく、人里はなれた山の中で、世界と日本の未来を語り合う。そのアンバランスが新鮮で、面白かった。

その後も、全国地方議員集会などでこの会場に行ったが、いつもみんなで毎日山を登るのである。「この道を歩いて登れなくなったら、引退ということかな」などと言いながら。

今大会では不破哲三氏が議長を引退し、私と同年代の志位委員長が名実ともに党首として責任を負うこととなった。宮本氏、不破氏の時代のように、一路前進・躍進とはいかず、山あり谷あり、明暗ありのむずかしい時代となってきた。志位さんも大変だ。小泉やホリエモンのようなペテン師がもてはやされ、若者の多くが自民党を支持するというヘンな日本になってきたが、そんな時だからこそ共産党も正論を正面にかけながら、そんな若者に理解されることばを使って活動を進めることが求められる。

しかし一方で私は、日本社会にしっかり根を張った共産党の83年の歴史はダテではない、近く大きな出番が必ず来る、とも思っているのである。